

## 教育問題と「言説」という視角

### 1. 教育を考える一言

「殺し文句」という言葉をここでは挙げます。これは、新堀通也の言葉です。

### 2. 背景

新堀によれば、教育の場では「殺し文句」が非常に頻繁に発せられます。「殺し文句」は、教育の場では特定の人々に対して行動を統制し支配するような作用を及ぼすことがあります。例えば「個性の尊重」のように一定の行動を促したり、あるいは「管理主義」のように一定の行動を批判し攻撃、統制したりします。

### 3. 考察

これを教育言説と捉えた場合、「殺し文句」を発することは、権力関係を確認、形成することで、一定の人々の行動を統制し従属させることに「説得力をもたせて正当化する」レトリックの一種であるということが出来ます。今津は、小浜逸郎の教育言説に関する議論を示しながら、マスメディアに登場する教育論が構成してしまう教育現実像や教育理念像は、世論の対象となり、ときには世論を主導し、ひいては教育政策や学校経営、教師の実践などを左右する（今津 1997: 4-5）と指摘します。例えば、いじめや不登校が論じられる時の、「カウンセリング・マインド」があります。これは生徒の立場にたった理解を目指す意味で評価される一方、多くの生徒を担当する教師と「冷めた」生徒の双方にとって、過大の期待と重圧をかける可能性があります。方法論に関しても、この言葉が説くのは、専ら心構えであり、具体的な心の理解の仕方は明確にされず、経験的な勘や直感に焦点があてられがちです。また、60年代までの言説に対する批判を前提としているため、60年代までの理解の客観性や科学性が過度に軽視され、また教育目標が制限され、教師がカリキュラムへの関心を低下させる可能性があります。言葉が「聖性」をもって人々を鼓舞し、新たな価値の伝達や価値共有を可能とする側面は重要である。しかし、多くの場合に抽象化され、一人歩きすることの多い教育言説に触れる際には、その背景にある権力構造に意識を向け、歴史的な脈の中で捉えることが重要となる。でなければ、教育言語は、その分かりやすさとは裏腹に、一定の経験と背景を持つ人々にとってのジャーゴンと化し、ある場合には抑圧的、威圧的に作用して、教育活動を阻害してしまう可能性を心に留めておく必要があるだろう。

### 引用・参考文献

今津孝次郎、樋田大二郎『教育言説をどう読むか』新曜社、1997.